The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

久保天随博士小伝

黄得時

はしがき

久保天随博士の名は、中国文学に志した者の一度は必ず聞く名である。或いはその著書に厄介にもなっている筈でもある。博士の諸々の著書は、今日からみれば必ずしも十全とは思われないが、それはそれで当時啓蒙的役割を十分果したものと思われる。私は博士に特に関心を持つようになったのは、別に学問的興味からではない。数年前、同郷の故長田新博士から久保天随は同郷高遠藩の出身であると聞いてからである。わが郷里には佐久間象山、太宰春台のような漢学者もおるにはおったが、文学とは縁が遠い。そこで私は天随博士に、中国文学を専攻する同郷の人として関心を持つようになった。またその後ドイツ文学専攻の故西田正一教授が、私に天随博士には、ファウストの訳もあると告げられたこともある。私は益々博士に興味を持ったけれども、その経歴も、人柄も知りようもなく今日になった。たゞ台北帝大の教授であったことはつとに知っていた。そこでこの三月末、台北に渡ったついでに、博士について多少の知識を得たいと思っていたところ、博士から親しく教を受けられた黄得時氏が、博士のあとを継ぐがごとく、現在台湾大学文学院中文系の教授をしておられたので、私は教授に博士について色々聞いたり、また今、台湾大学図書館に蔵されている久保蔵書をくまなく見ることができた。黄教授は最近重ねて標題のごとき一文を寄せられた。これを筐底に私蔵するのもおしいので教授の許しを得て発表することにした。なお天随博士については、もと台北帝大におられた神田喜一郎博士におたづねするようにとの黄教授の注意もあつたが、まだ神田先生には帰国後拝眉の機を得ない。

（小尾郊一）

碧天如夢夜微茫。
最可憐宵最断腸。
簾外春寒月当午。
満身花影讀西廂。

昔から「旃檀は二葉より芳し」といふ言葉があるが、誠にその通りで、後年漢詩人として、また漢学者として、明治、大

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

正、昭和の三代に亘って令名を擅にした久保天随博士は、早くも十八九才の少年時代に上掲の七言絶句を作られたのである。その格調といひ、風韻といひ、はた又意境といひ、誠に堂々たるもので、殊に転結の「簾外春寒月当午、満身花影讀西廂」二句は、全く写実の手法を使ってゐるため、十八九の一少年が西廂記に讀み耽けてゐる情景が、ありありと眼前に浮んでくる。

この詩について先生は次のように述べられてゐる。

「これは決して虚泛なる構想ではない。この詩は、その後幾たびか狡児輩に剽竊されたことが有った位で、その当時、予は頗る得意であった。」（支那戯曲研究後記）

先生は「西廂記の研究」で博士を授けられたが、先生は少年時代から早くも西廂記と深い因縁を結んでゐたことはこれによって解るのである。

先生の本名は「得二」で、別号を「兜城」と稱したが、この別号は先生の生涯を通じ殆んど使用されてゐなかったやうで、大抵の場合は「天随」を用ひられてゐた。中国式に云へば「以字行」である。郷里は長野県の高遠であるが、実際は明治八年（一八七五）七月、東京市下谷区徒士町和泉橋で生れた。だから先生を江戸児と称してもよい訳である。先生の父は藁科氏で、母は久保氏、世々兵法をもつて信州高遠藩主内藤氏に仕へたが、父譲次は藩主の命により、先生に生母久保氏の姓を名のらしめた。

先生は明治三十二年（一八九九）に東京帝国大学漢文科を卒業せられ、当時学界に重きをなしてゐた「帝国文学」やその他の雑誌に、盛んに評論、随筆、紀行文などを書き、赤門出の青年文士田岡嶺雲、白河鯉洋、笹川臨風、大町桂月等と共に、漢文調をおびた美文をもって文壇の一角を占めた。当時は観光事業が今日のように発達してゐなかったので、鉄道省で新しい鉄道を敷くたんびに、先生らを招待して美しい紀行文を書いてもらい、それによって大に観光客を吸収したのである。それで先生は全国どこへ行っても只で汽車に乗れるといふ時期があったさうである。一方、先生はまた漢籍の評釈や漢詩の訳註などの啓蒙的仕事をなされ、この方面に関する著述も数多く出版された。

先生が大学を出られてから約二十年の久しきに亘って「この繁忙にして或は無意味に近い売文生活」（先生御自身の言葉、支那戯曲研究後記による）を夢のやうに過ごし、大正四年五年の交りに新しい境涯が開かれた。それは大礼記録編纂委員会の嘱託であった。同会は内閣文庫の楼上に設けられた関係、先生は公務の餘暇を利用して同文庫の蔵書を自由に閲讀することができた。これは先生をして売文生活を離れ、学問の研究に足を踏み込ませた重要な契機であつた。もし当時の先生にこの一職がなかったとしたら、恐らく一生、売文生活で終ったかも知れなかった。当時最も先生の趣味をひいたのは中国の戯曲に関する材料であった。先生は嘱託を解かるる

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

に至るまでの凡そ三個年間は、専ら餘暇を利用して材料の抄録に充てゐた。

大正六、七年頃、先生の友人上村売剣氏が「文字禅」といふ漢詩専門の雑誌を創刊したが、先生は同雑誌に「西廂記の解題」を数号に亘って書き、相当好評を博した。又七、八年頃には、「西廂記雑考」「西廂記続撰の諸劇」等を「帝国文学」に発表した。

大正九年の秋から先生は宮内省図書寮の編修官に就任された。ここで又も同寮の蔵書を思ふ存分閲讀する機会に恵まれ、中国戯曲史を編著しようとさへ考へたことがあつたが、あまり題目が大きいため到頭実現するに至らなかった。

大正十三年の夏、先生は満洲に遊んで詩集「遼審遊草」を著し、翌十四年の春頃から約三個月を費して「西廂記の研究」を書き上げ、同年九月、華北の旅から帰って再び二三個月を費して補訂し、十一月末に東京帝国大学に提出して学位を申請し、昭和二年（一九一三）十月初、同教授会を通過、十一月七日、文部省の認可を経て文学博士を授けられた。

同年四月、陶鷗吟社の主事佐藤六石氏が逝去したので、先生はその遺嘱により同社の主事となつた。

昭和三年三月、台北帝国大学新設せらるるや、翌四年（一九一五）四月十一日、先生は同大学の教授に就任せられ、文政学部東洋文学科に於て中国文学講座を擔任、中国文学史を始め、「桃花扇」「琵琶記」「鷗北詩話」等を講義、講讀する外、福州に遊んで福建通紀の著者であり、又詩人として全中国に名高き陳衍（石遺）の知遇を受けて、「閩中游草」を著し、又澎湖を旅行して「澎湖游草」を著した。尚琉球をも訪問して「琉球游草」を刊行した。一方先生は台北在住の日本人の漢詩人　大浦思斉、伊藤壺渓、西川萱南、小松天鎖、賀来成軒、三屋清陰、柳田陵村、尾崎吉村、猪口鳳菴、神田鬯庵、渡辺直峰、大西笠峰及び台湾の詩人　魏潤菴と共に「南雅社」を結成し、昭和六年より昭和九年までに「南雅集」四輯を刊行した。

昭和九年（一九三四）六月二日、先生の居住してゐられる台北市昭和町附近に落雷があったので、当時、病臥中であつた先生はその大音響の衝撃を受け脳溢血を起して享年五十九をもって逝去せられた。葬儀は三板橋葬儀堂で行はれた。遺子は舜一氏である。

先生は平生口舌が頗る鈍く、講義される場合はどもりがちであるが、一旦筆を執られると、千言立ちどころに就る、といふ敏捷さであるから、先生の著作は文字通り汗牛充棟である。今これらを四部門に分けることができる。

第一部門は評論、随筆紀行文の類である。これは前述の通り、先生が大学を出られてから約二十年間売文生活をしてゐられた時代の作品で、いはゆる美文が主であつた。書き振りは雄勁で詞藻に富み、「帝国文学」に発表された「覚悟禅批評」の如きは特に注目された。又明治三十二年、浅野馮空、戸

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

沢姑射との合著になる美文「白露集」及び紀行随筆集「山水美論」なども文壇の注意を引いた。大正五年九月二日発行の「日本及日本人」第六百八十九号の臨時増刊「現代日本名家文章大観」特輯の中で、先生は「文章の精神と姿趣」と題する一文を寄せられてゐるが、「文章観」について次のやうに述べられてゐる。

「意匠経営惨澹中てふ七字の中にすべての芸術の研究態度は尽きてゐる。…そこで文章の理想は極めて些少なる労力を以て極めて有效なる印象を讀者に与へることに在るので万般の技工は主としてこれが爲に案出されたものであって、古往今来、修辞学者の云々するところも決してこの外に超出し得ぬ筈である。……もとより予輩は文体の如何は問はないが、唯だ文章の精神姿趣を重んじ、簡切含蓄を以てその極致となし、つまり前にもいへるが如く、讀者をして最少量の労力に因つて最有效の印象を得せしめむことを欲するのである。」

以上によって吾々は、先生が文章を書く上には技工が特に大事であると主張されてゐることが解るのである。蓋しこれは美文家として当然の見方である。

第二部門は中国古典の註釈や翻訳である。明治三十三年「支那文学大綱」中の「韓退之、柳宗元の評伝」を始めとし、「続国訳漢文大成」に収められてゐる「李太白詩集」「韓退之詩集」「高青邱詩集」の訳解などは斯界に重きをなしている。又「水滸伝」「琵琶行の戯曲」の翻訳がある外、ゲーテの「ファウスト」の日本訳もあるが、世人には始んど知られてゐないやうである。

第三部門は学術著述である、これには「支那文学史」「支那戯曲研究」及び「剪燈新話と東洋近代文学に及ぼせる影響」等がある。支那文学史は明治三十四年頃、早稲田大学の講義録に執筆せられ、その後約四回の刪補を経て、明治四十三年夏、単行本として同大学から出版されたものが尤も完備したもので、上下二巻に分かれ、総頁数八百十一頁に及んでゐる。先生が台北帝国大学で講義されてゐた時は、大体この本に基いて更に補訂を加へられてゐた。私は日本で出版された中国文学史は、明治十五年に出た末松謙澄の「支那古文学史」を始め、古城貞吉、笹川臨風、中根淑から、最近の倉石武四郎、及び実藤遠の「中国近代文学史」に至るまで、凡そ中国文学史と名のつくものは殆んど漏れなく蒐集して居り、而も全部通讀したが、久保先生の文学史は、これらの文学史に伍して些かの遜色がないばかりか、一家の言を立てゝゐる所が非常に多い、にも拘はらず、学界から餘り重要視されず、早期の中国文学史といへばすぐ古城貞吉のものを推すことが例になってゐるが、私は些か残念に思ふのである。勿論古城氏のものは色々とすぐれた点もあらうが、詩歌及び文章に重きを置くあまり、小説や戯曲を全然取り入れてゐないのは、何んといつても不当であると云はねばならない。そこへ行くと、久保先

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

生の文学史は、勿論今日の眼光から見れば色々な欠点もあらうが、とにかく小説戯曲を軽んずる当時の風潮を推切って、文学史の中に堂々とそれらを取入れてゐる点などは、先生の高邁な見識を示して餘りがあり、そのもつ価値をもっと高く評価して然るべきであると信ずるものである。

次に「支那戯曲研究」は先生の学位論文で、昭和三年九月東京の弘道館から刊行せられた。前後二篇に分かれ、前編は専ら「西廂記の研究」、後編は「諸名劇の梗概」、附録として「讀曲観劇雑詠」及び後記が収められてある。この著作も相当価値の高いものであるが、これも前述の文学史と同様に餘り学界の注目を引かなかった。これは恐らく先生が大学に講席をもたず、民間学者としてその研究を発表したため、学界から餘り重要視されなかったのによるものと思ふ。学閥の影響が如何に恐しいものか、ここにもその一斑が窺はれるのである。

「剪燈新話と東洋近代文学に及ぼせる影響」は、昭和九年五月刊行の台北帝国大学文政学部文学科研究年報第一輯に発表されたもので、先生の在職中に書かれた論文といへばこの一篇だけである。

第四部門は即ち漢詩である。先生の漢詩は、初めこれといふ師承もなく、後、森川竹溪と相識って師友となり、又、野口寧斎、北条鷗所に従って益を乞ふたことがあり、その作風は近世を宗とし、古詩は呉梅村を学んだ。諸体とも兼ね長じてゐたが、多作な点に於ては、他の如何なる日本詩人もそれに及ばないやうである。同じ景色を見ても、他人は一首か二首しか作れない場合でも、先生は立ちどころに十首二十首と泉の滾々と湧くが如く、極めて自然に出て来るのである。その多才は実に驚くばかりである。しかも足跡の及ぶ処、必ず詩に詠ずるといふ、云はゞ「詩を以って紀行に代へる」といふやうな工合である。詩集としては「讃州游草」「関西游草」「続関西游草」「樺域游草」「遼審游草」「閩中游草」「澎湖游草」「琉球游草」及び「秋碧吟廬詩鈔」等がある。その内「詩鈔」は全部十八巻あり、第十三巻より第十八巻までは、乙丑(大正十四年)より庚午(昭和五年)までの詩を、先生の歿後、岡崎壮が編輯し、嗣子舜一氏が印行したもので、古今体合せて一千五百首を収めてある。巻頭に神田喜一郎氏の叙文、巻末に岡崎壮の跋、扉に落合爲誠の題字があり、先生の最後の詩集である。

先生の蔵書は殆んど中国文学関係ばかりで、戯曲と詩集が主である。これと云って特に珍しいものはないやうであるが、戯曲の種類の多い点に於ては、恐らく日本一ではなからうかと思ふ。先生の歿後、これらの蔵書は台北帝国大学に帰し、現在国立台湾大学図書館本館に「久保文庫」として収められてゐる。殆んど木版本で、全部八百九十四種ある。これらの蔵書を看て感ずることは、凡そ先生が親しく讀まれた本は、木版本たると活字本たるとを問はず、必ず朱墨で丹念に句読点を打ってあることである。以って先生の読書が如何に

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

厳密で、一字一句と雖へども決して忽せにしなかったことが窺はれるのである。

今振り返って先生五十九年の生涯を考へて見るに、先生は研究家よりも創作家であり、学者よりも詩人であつたといふ風に見るのが最も妥当ではなからうか。研究方面では、華々しい成果こそは挙げてゐられないが、詩の方面では末永くその光を放つものと信じて疑はないものである。

NII-Electronic Library Service